

町と稱せりといへり。龜尾記にも、大工町は寛永八年町割の頃工匠の比屋せし者共にて、其の餘れるもの今の出大工町へ家出せしゆゑの號也。といへり。又一説には、微妙公小松在城し給ふ頃、小松に詰め居たる大工共萬治元年寔逝の後金澤へ戻り、居邸を木倉町の末にて賜へり。故に出大工町と呼べりともいへり。いづれ正説ならんか。扱元祿九年の地子町肝煎裁許附に、出大工町之内五軒とある五軒は、此の町内にて居邸賜はりし大工五人、邸地を指上げ退去せしゆゑ、其の跡地地子地に命ぜられ、地子肝煎の裁許と成りたるものなり。其の後追々大工共退去して、多分地子地と成り、大工拜領地は些少なりしといへり。

○木倉町上宮寺

東方眞宗道場也。三箇屋版の六用集に、上宮寺出大工町。と記載す。明細記に云ふ。上宮寺開基は唯性、俗姓は新田義泰と云ふ。本願寺第三世覺如法主より信仰一心なきを感賞して、祖師眞蹟の十字名號を賜へり。延文三年當國石川郡押野村に一字建立、七世慶了代天正年中、織田右府公石山本願寺を攻めらるゝ時、戦功を顯し、本願寺十二世教如法

主其の誠忠を感賞し、壽像を賜へり。天文十二年正月押野村より金澤へ移轉し、後舊藩主前田利長卿より現今の地を寄附せらる。とあり。按ずるに、貞享二年の由來書には、延文中唯性の時石川郡押野村に建立、十二世慶了の時本願寺東西に別れ、此の時父子流浪し佐渡に移りける處、利長卿の召によりて金澤へ來り、出大工町今の寺地を拜領被仰付。とあり。石坂瑞泉寺も、昔は石川郡押野村に在りて、上宮寺といへり。

○御坊の小路

元祿六年の土帳に、出大工町御坊の小路。とあり。上宮寺の横小路をいへり。

○大藏小路

舊藩士大藏氏の居邸ありし故に、大藏小路と呼べり。元祿六年の土帳に、大藏勘右衛門出大工町後木梨助三郎隣。と見ゆ、享保九年の土帳に、七百石大藏十郎兵衛出大工町後。とあり。按ずるに、延寶の金澤圖に、大藏勘右衛門の居邸なるよし記載すれば、延寶以前より此の地に居住せし事知られけり。

○大藏勘右衛門傳

諸士系譜に、元祖勘右衛門微妙公の時召抱えられ、家祿七百石を賜へり。二代勘右衛門、三代勘右衛門と稱す。按ずるに、元和元年の土帳に、馬廻組七百石大藏喜内と見ゆ、寛永四年の土帳には、七百石大藏勘右衛門とあり。是元祖勘右衛門にて、初め喜内と稱せり。扱四代十郎兵衛は實は永井左門の二男也。三代勘右衛門の嗣子となる。五代勘右衛門は實は高木源次の三男也。十郎兵衛の嗣子と成り、初めて大小姓組より登庸せられ、先筒頭にて盜賊改役を勤め、後金澤町奉行・定番馬廻番頭を勤めたり。夫れより後も世々七百石を領し、子孫連綿して藩政の職務を勤めたり。

○鬼川橋

此の橋は、出大工町より横傳馬町・鹽川町へ往來する橋にて、鬼川に架けたる故に鬼川橋と呼べり。元祿三年の捨子届書に、鬼川橋番人作左衛門。とあり。惣稱橋に非ずといへども、舊藩中は橋番人を置きたり。今鹽川町入口の角家は也。鬼川橋の名は、三壺記に、寛永七年六月前田肥後喧嘩の條に、鬼川の橋へ行懸り、橋爪へ渡り懸けゝるに、橋の

真中にて鞘とさやとはつしと當る云々。とある橋は、長町四番丁の橋ならんか。鬼川の川筋なる橋梁なりし故に、鬼川の橋と載せたるなるべし。菅君雜錄に、右喧嘩の時の橋は、富田右衛門居邸の前なる世人右衛門橋と號する橋なりと註せしは非也。右衛門橋は香林坊橋の下にて、倉月用水川の橋也。鬼川の橋梁に非ず。

○鬼川

此の川は、五枚町大野瀬木より犀川の流を塞ぎ入れけるゆゑ、甚だ清潔にして、其の流また急流なり。三州名跡志に、昔金澤城普請の時分、官腰より用水等（材）を此の川筋へ引上げたり。故に御荷川と云ひ、俗に鬼川とす。といへり。三州志來因概覽附録に云ふ。寛永八年四月金澤火災、城内延燒後造營の時、官腰の材木を鬼川まで引上げたり。故に御荷川の名ありと云ふ。又一説には、昔尾山に本源寺ありし頃、本源寺への荷物を積み、粟ヶ崎川口まで出す。故に其徒御荷川といふを、後に誤りて鬼の字を書けり。兩説孰れかはなるを知らずとあり。平次按ずるに、寛永八年金澤府城火災に罹りける時は、俄に造營の材木もあらざれば、其の頃